

平成 25 年 9 月 2 日	病害虫発生予報 9 月号	茨城県病害虫防除所 茨城県植物防疫協会
--------------------	-------------------------------	------------------------

台風の接近が多くなる時期です。天気予報を見て適切に防除しましょう。

～平成 25 年度秋季農作業安全推進運動期間中です（9/1～9/30）～

＜ 目 次 ＞

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
大豆：チョウ目幼虫，カメムシ類	1
サツマイモ：チョウ目幼虫（ナカジロシタバ等）	2
ナシ：ナシヒメシンクイ	2
アブラナ科野菜：ハイマダラノメイガ（ダイコンシンクイムシ）	3
共通害虫：オオタバコガ	3
共通害虫：ハスモンヨトウ	4
【その他の病害虫】	5
大豆，ナシ，ブドウ，果樹共通，秋冬ネギ，秋冬ハクサイ	
施設野菜におけるウイルス病を媒介する微小害虫の防除対策について	6
II. 今月の気象予報	7
最新の農薬登録内容は，（独）農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」（ http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm ）で確認することができます。	
詳しくは，病害虫防除所へお問い合わせ下さい。 茨城県病害虫防除所 Tel：029-227-2445 予報内容は，ホームページでも詳しくご覧いただけます。 ホームページアドレス http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/	

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

大豆

1. チョウ目幼虫

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、大豆圃場におけるその他チョウ目幼虫(オオタバコガ、ツメクサガ等)の寄生虫数は平年並(本年値 4.7 頭, 平年値 4.1 頭(25 株調査))で、発生地点率は平年より高い(本年値 92%, 平年値 62%)。
- ② 8月下旬現在、大豆圃場におけるハスモンヨトウの発生量は平年よりやや少ない。
- ③ 8月下旬現在、フェロモントラップへの誘殺数はオオタバコガで平年並～やや多く、ハスモンヨトウで平年並である。
- ④ 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年並か高く、降水量は平年より多いと予想され、特に発生を助長する条件ではない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を行う。
- ② ハスモンヨトウでは、白変葉(若齢幼虫の集団加害によって白く透けた葉)の発生を防除の目安とする。
- ③ 薬剤散布の際は、葉裏や莢にも薬剤がかかるように丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、系統の同じ薬剤は連用しない。

2. カメムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、大豆圃場における吸実性カメムシ類の寄生虫数(幼虫及び成虫)は平年よりやや少なく(本年値 0.3 頭, 平年値 0.6 頭(25 株調査))、発生地点率は平年並(本年値 23%, 平年値 26%)である。
- ② 8月下旬現在、予察灯(龍ヶ崎市)の誘殺数は平年並～やや多い。
- ③ 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年並か高く、降水量は平年より多いと予想され、特に発生を助長する条件ではない。

[防除上注意すべき事項]

- ① カメムシ類の防除適期は莢伸長期～子実肥大中期(粒の長径が 0.5～1cm 程度)頃である。発生の多い圃場では、莢が伸長する頃から 7～10 日ごとに 3 回以上防除する。
- ② カメムシ類の成虫は子実を加害しながら、葉や莢に産卵する。卵からふ化した幼虫も子実を加害しながら成長するため、幼虫の発生状況にも注意する。
- ③ 薬剤散布の際は、薬液が葉だけでなく莢によくかかるよう注意する。特に、圃場の周縁部はカメムシ類の生息密度が高い傾向にあるため、丁寧に散布する。

サツマイモ

1. チョウ目幼虫（ナカジロシタバ等）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、被害葉率(本年値 24.4%、平年値 20.5%)、発生地点率(本年値 100%、平年値 99%)ともに平年並である。
- ② 8月下旬現在、ナカジロシタバの第三世代幼虫によると思われるつる先の被害を認めている。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年より多いと予想され、特に発生を助長する条件ではない。

[防除上注意すべき事項]

- ① ナカジロシタバは、第三世代幼虫の被害が最も大きい。老齢幼虫になると食害量が多くなるので、若齢～中齢幼虫の時期（丸く穴の開いた葉が散見される時期～葉面積の25%程度を食害された葉が目立つ時期）の防除に努める。
- ② 薬剤散布の際は、幼虫が生息する葉裏までよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。

ナシ

1. ナシヒメシンクイ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、フェロモントラップへの第三世代成虫の誘殺数は、小美玉市、かすみがうら市及び土浦市で平年より多く、笠間市で平年よりやや少ない。
- ② 8月下旬現在、被害果率は平年よりやや低い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 被害果を見つけた場合は、土中深く埋める等速やかに処分し、次世代成虫の発生を防ぐ。
- ② 薬剤は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。
- ③ 薬剤防除の際には、収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。
- ④ 早生品種（「幸水」等）で被害果が認められた場合は、晩生品種（「豊水」や「新高」等）を対象に薬剤散布を徹底する。

アブラナ科野菜

1. ハイマダラノメイガ（ダイコンシンクイムシ）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、笠間市で実施している誘引植物（クレオメ）を利用した調査では、ハイマダラノメイガ幼虫の寄生株率は平年並である。
- ② 8月下旬現在、水戸市のキャベツ（無防除）における発生量は、昨年より多い。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年より多いと予想され、特に発生を助長する条件ではない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 今後、播種や育苗・定植を行うアブラナ科野菜は特に注意する。
- ② 本虫は、アブラナ科野菜の幼苗期（育苗期や本圃での生育初期）に、幼虫が生長点付近を加害する。加害されると芯止まりになるので、早期発見、早期防除に努める。
- ③ 苗床は、防虫ネット（1mm目合い程度）などで覆い、成虫の侵入を防ぐ。
- ④ 薬剤散布は、株の中心部や葉裏にも薬液がかかるように丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。

共通害虫

1. オオタバコガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は水戸市で平年よりやや多い～多く、土浦市、龍ヶ崎市、筑西市で平年並である。
- ② 8月下旬現在、大豆等で幼虫の発生を確認している。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年より多いと予想され、特に発生を助長する条件ではない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ② レタスやハクサイ等では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、発生初期及び結球始期の防除を徹底する。
- ③ トマト、ピーマン等では収穫終期まで加害が続くので、発生しているハウスでは防除を徹底する。
- ④ 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ⑤ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう丁寧に散布する。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。

(共通害虫 続き)

2. ハスモンヨトウ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は水戸市、鉾田市、土浦市、龍ケ崎市、筑西市で平年並で、笠間市で平年より少ない。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年より多いと予想され、特に発生を助長する条件ではない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 圃場をよく観察し、若齢幼虫の集団の早期発見に努める。幼虫が中齢以上になって分散して食害するようになると、被害量が増大するだけでなく、薬剤の効果も低くなるため、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ② レタスやハクサイ等では、結球内に幼虫が入るとその後の防除が困難になるため、発生初期及び結球始期の防除を徹底する。
- ③ 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ④ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう丁寧に散布する。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
大豆	紫斑病	発生量：－	防除適期は開花期の20日後頃である。県内では、チオファネートメチル剤に対する耐性菌が出現しているため、それ以外の薬剤を使用する。
	アブラムシ類	発生量：やや多い	8月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
	ハダニ類		
ナシ	黒星病	発生量：－	8月下旬現在、平年より少ない発生である。多発した圃場では、秋季防除を徹底する。特に、徒長枝に薬液が十分かかるように薬剤散布を行う。
	ハダニ類	発生量：多い	8月下旬現在、平年より多い発生である。
ブドウ	褐斑病	発生量：平年並	8月下旬現在、平年並の発生である。多発した圃場では、収穫後の防除を徹底する。病原菌の翌年への越冬を防ぐため、早期に落ちた葉は回収し、適切に処理する。
	晩腐病	発生量：－	8月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
果樹共通	カメムシ類	発生量：やや少ない	8月下旬現在、予察灯への誘殺数は平年より少なく、ヒノキ林における次世代幼虫の発生量は平年よりやや少ない。
秋冬ネギ	ネギアザミウマ	発生量：平年並 ～やや多い	8月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
ハクサイ 秋冬	軟腐病	発生量：－	台風等の強風を伴う降雨の後には、防除を徹底する。

施設野菜におけるウイルス病を媒介する微小害虫の防除対策について

8月下旬現在、抑制トマトで黄化葉巻病の発生を確認している。
微小害虫（コナジラミ類、アザミウマ類等）により媒介されるウイルス病は、生育初期に感染すると被害が大きくなる。以下を参考に防除を徹底する。

〔防除対策〕

- ① ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、ハウス内への飛び込みを防止する。なお防虫ネットを設置した場合、通気性が低下し、病害の発生が助長されたり、ハウス内の温度が高くなることが予想されるので、ダクト通風やサイドの開閉、遮光資材の利用等、温湿度管理に十分注意する。
- ② 雑草は微小害虫の生息場所となるため、ハウス内外の除草を徹底する。
- ③ 多発生すると防除が困難となるので、初期防除に努める。なお、黄色粘着板（コナジラミ類）や青色粘着板（アザミウマ類）の設置は、誘殺の他、発生動向の確認に利用できる。
- ④ ウイルスに感染した株は、伝染源となるため早期に抜き取り、ビニール袋等に入れて密封し、株を枯らしてから処分する。

表 微小害虫により媒介される主なウイルス病と感染作物

種類	主な媒介ウイルス名	主な感染作物
タバココナジラミ	トマト黄化葉巻ウイルス (TYLCV)	トマト
	ウリ類退緑黄化ウイルス (CCYV)	メロン, キュウリ, スイカ
タバココナジラミ, オンシツコナジラミ	トマトクロロシスウイルス* (ToCV)	トマト
ミカンキイロアザミウマ	トマト黄化えそウイルス (TSWV)	トマト, ピーマン, ナス
	キク茎えそウイルス (CSNV)	トマト, ピーマン
ミナミキイロアザミウマ	トマト黄化えそウイルス (TSWV)	トマト, ピーマン, ナス
	メロン黄化えそウイルス (MYSV)	キュウリ, メロン, スイカ
ヒラズハナアザミウマ	トマト黄化えそウイルス (TSWV)	トマト, ピーマン, ナス
ネギアザミウマ	トマト黄化えそウイルス (TSWV)	トマト, ピーマン, ナス
	アイリスイエロースポットウイルス (IYSV)	ニラ, ネギ

※トマト黄化病の病原ウイルス

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 8月31日から9月27日)

気象庁(8月30日 発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	20	40	40
降水量	関東甲信全域	20	30	50
日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

<1週目の予報> 8月31日(土曜日)から9月6日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率40%

<2週目の予報> 9月7日(土曜日)から9月13日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率40%

<3週目から4週目の予報> 9月14日(土曜日)から9月27日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず、良く洗浄しましょう。